Osaka University Knowledge Archive

Title	<書評>上田健一著　「糸へんデザイナーの歩み」
Author(s)	中西, 徹
Citation	デザイン理論. 1983, 22, p. 110-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52678
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評

上田健一 著

「糸へんデザイナーの歩み」

当学会の会員であり，松ケ崎意匠会会長であり，永らく鐘紡のデザインセクションの指導をされ，また関西のデザイン会の先駆者的役割をしてこられた上田健一さんが一昨年夏，「糸へんデザイナーの歩み」という著書を出された。

それは一見，上田さんの自伝風に書かれているが，大阪のデザイン史，もっと大げさにいえば生きている昭和史とも見ることができ，また見方を変えれば企業内のデザイナーのデザイン哲学を学ぶことも出来る。このような理由で本学会の会誌にとりあげた次第である。

本著により上田さんの経歴の概要を紹介する。

上田さんは大正元年（1912）大阪市北区天満二丁目に生れる。大阪旧市街の真中に生れた処に、後年のデザイン感覚との係り合いが見られる。大正14年（1925）大阪市立工芸学校図案科に入学。学校は上田さんと相前後して中村真・早川良雄などを輩出した名門校である。次いで昭和５年京都高等工芸学校図案科に入学。ここで霜鳥先生に親しく教授をうける。昭和８年（1933）高等工芸を卒業すると同時に鐘渕紡績株式会社に入社。社長津田信吾氏に知遇。1933年は世界的にもデザインが一つの頂点を迎えようとした時期である。世は流線型時代，機能は美を決するという機能主義が蔓延していた。このような時代が幸いしたかどうかは定かではないが，上田さんは実に入社後三年，弱冠24才にして大鐘紡の意匠課長に任ぜられる。おまけにその翌年，昭和12年（1937），10ケ月にわたりヨーロッパからアメリカにかけデザイン事情の視察の出張を命じられている。この処遇は当時としても破天荒なことであっただろうが，現代の私たちにとっては想像を絶することがらである。誠に羨やましい限りである。

が，上田さんは帰国した翌年。昭和14年（1939）応召。中国中部，フィリッピン，ス

マトラ，カーニコバル島などに転戦。昭和21年復員する。陸軍大尉である。上田さんは軍隊にあっても，本職の軍人より，より立派な軍人であった。

復員後、直ちに鐘紡に復職するも何故か意匠課長ではなく平の係員として再出発しなければならなかった。しかも戦時中の無理がたたったか，病を得て床に臥すこととなる。療養中の会社の見舞いが，合理化のための退職勧告であった。大そう厳しい時代の上田さんの姿を見ることができる。

しかし不死鳥の如き上田さんは日本経済の復興とシンクロナイズして，またデザイン界の第一線に出て来る。戦後未だ海外渡航をする人が無い頃，昭和31年（1956）デザイン視察のためにヨーロッパ，アメリカへ出張。上田さんの海外旅行は主なもので三回ある。第一回は昭和12年、そのときは船と鉄道による旅行。第二回目、昭和31年はプロペラ機による渡航。第３回目は昭和37年，そのときはジェット機であったという。帰国後，図案課長に復活。昭和35年（1960）宣伝副部長。昭和37年（1962）第３回目の渡航。同年，鐘紡の美術室長兼宣伝部長となる。昭和40年（1965）鐘紡から転出，鐘紡の子会社，ジャパンテキスタイルデザインサービス株式会社の代表取締役になり，昭和50年（1975）には改称されたジャパンデザインサービス株式会社の社長に就任。懸命に後進の育成につとめ，またその会社を企業的にも健全な体勢にのせる。昭和55年（1980）ジャパンデザインサービス㈱を退職。

以上は本著の末尾に記載された上田さんの年譜から抜粋したものである。

戦前に既に社会で活躍し，途中で戦争に出陣し，戦後再び社会の第一戦で活躍する。これが現在日本の実業界をはじめ社会の第一線に位置する人々の大方のライフパターンである。そして，その人々にみることの出来る共通の特徴は，その人々が如何なる環境に置かれようとも一切不平を言わず，それこそ『一生懸命』の精神でその環境を自己のものにし，やがてその環境の第一人者になってしまうのである。それは優等生の進む道だと言ってもいいし，またオポチュニストの歩む道だともいえる。

しかし，上田さんがそれらの人々と異なる点が二つある。その第一は，終始一貫，デザインを学び，デザイン界で活躍し，後にデザインの後進を教え導いていることである。この上田さんのライフパターンが本著を単なる一個人の伝記に終らず，昭和初期，戦後混乱期，デザイン隆盛期に至る日本のデザイン昭和史をも読みとることができる基盤となっている。第二の特徴は、上田さんが鐘紡を『一生懸命の地』として鐘紡一途に奉公している点である。このことを上田さん自身大層ほこりと思っている。世のデザイナーには，その才に任かせて数々の会社のデザインセクションを転々とし，その数の多きを誇り，果ては独立してフリーのデザイナーになる例が多い。上田さんの道は異なる。上田さんは自己の

立場をハウスデザイナーと位置づけている。

「デザイナーは独立して営業するフリーデザイナーと、企業や団体に所属するハウスデザイナーに大別できる。両者には自ら就業状態に相違があり，デザインの責任とアノニマスの関係において，行動の基準に差異がある。」と上田さんはいう。また，ハウスデザイナーの厳しさについて上田さんは次のように言う。「商業デザインに関して，ものの大小を問わず“カネボウ”“Kanebo”の標示あるデザインはすべて鐘紡の表徴として，製作または商品化する以前に社長の承認を必要とした。（中略）社長からの指示が，たとえ難題であっても，それに積極的に取り組み，速やかに処理して，その結果を迅速に報告することが承認を受ける要訣であった。（中略）勤務デザイナーにとって優れたデザインと呼ばれるものに大体三つの種類があると思う。①トップが好みそうなデザイン。②営業マンが推薦するデザイン。③デザイン界で評価されそうなデザインである。そして①はデザインの良否または適，不適が問題ではなく，好きこのみの問題であることが多い。②は要するに儲かるデザインで，生産性の効率、コストダウンならびに市場性を配慮したデザインである。③はデザイン界で採りあげられるような問題作を意識し，意表に出ることを狙いつつ，専門家に対してもＰＲ効果を期待しているという種類の作品である。

この三種を独立して考えることは適当でない。三つの性格と解して，それぞれをどのようなウエイトでミックスさせ，効果的にデザイン面で演出し，表現してゆくか，ディレクターの工夫を要するところである。

しかし企業にとって，グットデザインとは利潤獲得に寄与したデザインを指し，最も高く評価することは間違いない。（中略）企業努力を通して，産業経済，生活文化向上に寄与しようとする基本理念に基づいたデザインに対して一部の人達にどのように評価されようとも卑屈にならず，思い上らず，プロとしての信念をどこまでも堅持しなければ，デザインに携わる意義がゆれてくる。」

「糸へんデザイナーの歩み」は本文 412頁の大著であるが，上田さんの哲学が，上田さん自らの言葉で語られることは殆んどない。大方は上田さんの行動、上田さんの業績を通じてうかがい知るだけである。その極く稀な上田さん自身が語る上田さんのデザイン哲学をここに読むことができる。ここで，上田さんは良かれ悪しかれハウスデザイナーのコンセプトを明確にしている。おそらく今日のデザイナー諸君やデザインを学ぶ学生諸君にとって同意出来ない点が多々あるであろう。ハウスデザイナーの自律性を何処に求めるのか。あるいは，企業性にウエイトをおき，利潤追求を目的としたデザインが果して人間生活に寄与でき得るのであろうか，それが本当に消費者のニーズに適応するデザインなのか。というような疑問が提出されるであろう。

この疑問については，上田さんは稿を改めて語っている。「『専門家が誉めたデザインよりも、素人の商人が考えたものの方がよく売れる』などと聞かされることが時々ある。これはデザイナーは広い視野から，また過去の経験と知識から判断して，将来の商品イメージに方向づけをしてデザインを追求することからくるものと考えられる。つまり目前よりも一歩先を予測している。しかし企業の目標はまず利益の追求にある。利益のないところに企業は存在しない故，結果的に売上の伸びに寄与したデザインが評価されることになる。たゞ，儲かるなればどんなデザインでもよいとするならば，社会秩序の上にも問題が生じてくる。優れたデザインと売れ筋デザインとの相関性については，デザインと営業マンとの相互協調，つまりマーケッティングとデザインとの調和が企業進展の要訣である。

デザインは消費者の指向に対応して，総合的に企業の利潤と信用の充実を図ってゆく。その戦術に創造性が生かされてこそデザインの意義と評価が存在する。そしてこれからのデザイナーは原価意識，製作の能率，効果の向上に無関心であっては，その職能は充分に発揮できないことを自覚せねばならない。」と。

凡そ世間に膾炙(かいしゃ)されているデザイン論は学者や評論家，あるいはフリーデザイナーの筆に依るものが大方で，上田さんのようなハウスデザイナーの立場で書かれたものは稀有である。デザインをコンセプトとして把握するときでも，このような立場もあることを教えられる次第である。願わくば，上田さんが上田さんの言葉でもっと多くハウスデザインについて語って欲しいのである。

つぎに，この著書は戦前の昭和初期，終戦後の混乱期，昭和30年代のデザイン勃興期，昭和45年，万国博覧会の日本開催を機にしたデザインの隆盛期。このデザイン界の変遷を上田さんは実に刻明に記録している。それは，ひとえに上田さんの几帳面さの賜物であるが，上田さん自身がその時代時代を代表するような作品を世に問うているからである。昭和８年（1933）大阪大手前の国民会館の緞帳。昭和23年（1948）貿易美術展応募のカネボウのポスター。昭和25年（1950）西宮北口で開かれたアメリカ博のポスター。昭和28年（1953）テキスタイルトレードフェアのポスター。昭和33年（1958）大阪国際見本市ポスター。これらはいづれも戦後の混乱期，あるいはデザインの勃興期に華々しく登場し，暗い世相に一条の光を与えたものであった。

このように上田さんの歩んで来た道が，即日本のデザイン昭和史であるということができる。

更に上田さんは日本宣伝美術協会（日宣美），綜合デザイナー協会（ＤＡＳ），日本ディスプレイデザイナー協会（DDA），の設立にも尽力されており，その意味でデザイン業界の歴史も見ることができる。

このようにみると，大阪北区天満二丁目に大正元年（1912）に生れた上田健一という一人の男が歩んできた足跡を記述した「糸へんデザイナーの歩み」という本著は，単なる個人の自伝でもなく，またハウスデザイナーの記録にとどまらず，それは先にも言ったとおり，日本の昭和デザイン史であり，もっと大げさに言えば生きた昭和史とも言い得るのである。

私は不幸にして上田さんと親しくお話しをしたことがない。従って本著からしか上田さんのことを知ることはできず，上田さんの哲学，上田さんの人間像も本著から形造らねばならなかった。だから，上田さん自身は勿論，上田さんと親しい方々にとっては物足りない点や不満足なところも多々あろうかと思うが，上述のような事情のためとお許しをお願いする次第であります。

（中　西　　徹）